

鎌倉期九州守護発給文書に関する一考察

豎 月 基

はじめに

鎌倉幕府の権力構造や政治体制の解明を目的として関東下文・関東下知状・関東御教書といった將軍や執権が発給した文書が、これまでさまざまな角度から検討されてきたことは周知のとおりである。また、幕府の地方機関の発給文書を扱った研究はそれほど多くはないものの、六波羅探題発給文書に関しては、比較的最近あいついで論考が発表され、体系的な理解が可能となってきた⁽¹⁾。

これに対して、同じく鎌倉幕府の地方機関である守護が発給した文書については、大番催促状や覆勘状の研究⁽²⁾、北条得宗家発給文書に関する研究⁽³⁾などがこれまでの主な成果として挙げられるが、これらは用途や発給者を特定した論考であるため、鎌倉時代の守護発給文書の全体像は明らかになっていないがたい状況であるだろう。古文書学の概説書でも守護文書に関する記述は少ないが、その中でもまとまった記述があるものには次のように説明されている。

「守護以下の発給文書は、幕府の職制上の地位によって様式が定ま

っていたわけではなく、彼等武士の家務文書（家領支配の必要上発給される文書）とだいたい同じ様式が用いられた。その様式には、幕府の御教書・奉書の系統に属するもの（奉書形式）と、発給者自身が差出者の形をとるもの（直状形式）との二種があった。（中略）奉書形式についていえば、これも目下（目付の下）に右筆が署判を加えるだけのものと、さらに発給者が袖判を加えるものとの二種があった。（中略）総じて、袖判を加えるのと否とにかかわらず、奉書形式の文書は、ごく限られた有力武士しか用いられなかったように、現存史料によれば、北条氏、足利氏、島津氏などがこれを用いている⁽⁵⁾。」

管見の限り古文書学的な観点からこれ以上詳細に鎌倉期の守護文書を解説した文献はなく、一国ごとに設置されて、主に軍事・警察権を司つたとされる守護の幕府職制上に占める位置を鑑みるに、この説明で鎌倉時代の守護発給文書が理解されたとするには、幕府や六波羅探題の発給文書の研究成果に比してあまりにも大きな落差があるといわざるを得な

い。

このような研究状況を踏まえると、まずは守護発給文書の様式や機能を整理・分類するという基礎的な作業を行う必要があるだろう。そこで、文書が豊富に残存する九州地方（対馬・壱岐を除く）の守護の中から数代にわたって守護職を歴任した御家人を対象に守護としての発給文書を蒐集して、鎌倉時代を通じて守護文書の様式の変化や用途を中心とした検討を行いたい。

その際、様式については、次のとおり四つの様式名を使用し、さらに守護発給文書の中心をなす書下を、堅紙を前提として事書（有、無）、書止文言（「恐々謹言」「仍執達如件」「之状如件」）、署判の位置（目下、奥）に注目して分類した。⁽⁶⁾

- ・（守護所）下文Ⅱ最初の一行が「（守護所）下」で始まるもの。
- ・下知状Ⅱ書止文言が「下知如件」となるもの。
- ・奉書Ⅱ発給者（守護）の意を受けて奉者が発したもの。
- ・書下Ⅱ下文と下知状以外で守護が発給者として文書上に現れているもの。次の八類型に分類。

① 書下A型…事書きなし、書止文言「恐々（恐惶）謹言」、目下署判

② 書下B型…事書きなし、書止文言「仍執達如件」、目下署判

③ 書下C型…事書きなし、書止文言「之状如件」、目下署判

④ 書下D型…事書きなし、書止文言「之状如件」、奥署判

⑤ 書下E型…事書あり、書止文言「之状如件」、目下署判

⑥ 書下F型…事書あり、書止文言「之状如件」、奥署判

⑦ 書下G型…書下A型から書下F型にあてはまらないもの

⑧ 折紙

なお、先行研究が存在する覆勘状や上申文書、守護の私領に関する内容の文書は検討の対象から除くことにする。

第一章 武藤氏の守護文書（表Ⅰ、表Ⅱ）

（Ⅰ）大宰府守護所下文（牒）と書下

武藤氏は鎌倉時代を通して守護であった筑前のほか、筑後・肥前・豊前・壱岐・対馬などの守護職に就任した経歴がある。⁽⁷⁾

武藤氏の守護文書としては、平安時代末期の大宰府発給文書を踏襲したとされる大宰府守護所下文（牒）がよく知られている（表Ⅰ）。⁽⁸⁾ 表Ⅰを見ると、事書きや書止文言など様式上の特徴に変化はみられないが、⁽⁹⁾ 蒐集した二十八通の内、二十七通が弘安二（一二七九）年までに発給されているように、大宰府守護所下文（牒）は主に鎌倉時代前半に用いられた様式であるといえる。⁽¹⁰⁾

これまで守護武藤氏の文書はこの大宰府守護所下文（牒）が注目されてきたが、これとは別に武藤氏が単独で発給者となる書下も多数存在する（表Ⅱ）。書下は初期に見られる特定の用途に用いられたものと折紙のもの⁽¹¹⁾を除けば、以下のように様式を整理することができる。

【史料一】（表Ⅱ—15）

今年九月一日 関東御教書今月十二日到来、写案献之、子細雖見状

候、やいかりならひにくるみのかわなかし、はしかみなかし、もさきをして、江河の魚をとる事、かたく可停止之由、被仰下候、然者、守 御教書之状、御所領内の住人等にも加下知、一向可令停止給候、恐々謹言

十一月十五日

少貳（花押）

武雄大宮司殿

【史料二】（表Ⅱ—46）

宮崎宮大導師法眼久慶申當宮每年加燈錢貨段別壹文事、今月十五日重御教書如此、度々催促之處、年々無沙汰之條、何様事哉、早任被仰下之旨、不日可被致其沙汰、若猶有難濟者、可注進候、仍執達如件

正中二年九月廿九日

筑後守（花押）

中村孫四郎殿

史料一は書下A型、史料二は書下B型である。表Ⅱの年号欄をみると書下A型には無年号と書下年号のものがあるが、無年号のものは武藤資能の守護在任期間と一致し、経資の代になると書下年号の書下A型へと変化していることが読み取れる。また、書下B型は、史料二のようにすべて書下年号、署判が「官途（沙彌）＋花押」となっている¹⁴、弘安九（一二八六）年以降、幕末まで発給されている。それぞれの使用時期には重複がみられず、武藤氏は書下を書下A型（無年号）↓書下A型（書下年号）↓書下B型へと変化させていったといえる。

このような書下と先の大宰府守護所下文（牒）とは如何なる関係にある

鎌倉期九州守護発給文書に関する一考察

ったのであろうか。書下の初見は大宰府守護所下文（牒）より遅れるが、それぞれの発給時期は重なっており、使用される期間が前後しているわけではない。そこで文書の用途に注目すると、大宰府守護所下文（牒）は一通を除き裁許や安堵・補任、過所など権利を付与する内容に用いられているのに対し、書下は問状や召文などの訴訟事務や法令の伝達、異国警固番役等の催促といった時限的な内容に使用されていることがわかる。つまり武藤氏はその用途により大宰府守護所下文（牒）と書下を分けていたといえる¹⁵。

（2）武藤氏における書下の発生

前節で大宰府守護所下文（牒）は権利の付与に用いられていることを指摘したが、これに該当しない例が存在する（表Ⅰ—10）。まずこの例外について検討したい。

【史料三】（表Ⅰ—10）

到来貞永元年十月三日

在判

守護所下 成恒大三郎國守

可早任六波羅殿御下知旨参上、弁申子細、大和太郎兵衛尉時景訴申、巧新儀不従地頭由事

右、今年八月十八日御下知今月八日到来備、大和太郎兵衛尉時景訴状ハ副証文V如此候、如状者、豊前國三毛下毛両郡吉富名地頭職相伝知行内、名主下作人等巧新儀、不従地頭云々、子細何様事候哉、早於宰府被召決両方、尋究淵底、可令注進申詞記候、仍執達如件者、

件事、早任被仰下之旨参上、弁申子細之状如件

貞永元年閏九月九日

(後欠)

【史料四】(表Ⅱ—2)

「到来貞永元年十月三日 在御判」

追申

大三郎國守同被載于太郎兵衛尉口状候、件人躰以御辺人口状者、同召具可有御上府御也、恐々謹言

大和太郎兵衛尉被申下候今年八月十八日六波羅殿御下知今月九月八日到来、写案献之候、子細雖見于状候、如状者、当國、三毛下毛兩郡吉富名地頭職相伝知行内、名主下作人等巧新儀、不従地頭云々、何様事哉、早於宰府召決兩方、尋究淵底、可令注進申詞記由、可被仰下候也、件事任御下知状、忝可有御上府候也、記録兩方御申状、可令進上六波羅殿候之由、可相存候也、恐々謹言

閏九月十七日

右衛門尉在判

成恒太郎殿

史料三は後欠部分に大宰府府官の連署が続くであろう大宰府守護所下文であるが、その内容は成恒國守に対する召文で、文書受給者に対して権利を付与するものではない。史料四は前節で検討した書下A型の初見文書であるが、引用している文言に若干の異同はあるものの、史料三と同じ六波羅探題の文書を施行して、成恒國守が大宰府に参上するように命じていて、史料三とほぼ同内容の文書となっている。ただ、宛所が史

料三では参上を命ぜられている成恒國守であるのに対し、史料四では成恒太郎となっているという相違点についてはどのように理解すればよいだろうか。

これに関しては、上杉和彦氏の庁宣副状の定義が参考になる。氏によると庁宣副状は「庁宣の発給に伴って、庁宣の實際の宛所を文面上の宛所としてかつ實際の宛所として送付され、庁宣による権利付与とそれに関する経過の説明を行う書状形式の文書」⁽¹⁷⁾であって、庁宣と庁宣副状の宛所は異なっているが、両方共に庁宣副状の宛所に届けられるとされる。氏の定義は庁宣副状の定義であるが、庁宣と庁宣副状の関係をそれぞれ史料三と史料四として見直すと次のようになる。史料四の追而書で成恒太郎に成恒國守を伴い上府するよう命じているように、史料三の命令は成恒太郎によって実現される。さらに、文書の袖に記されている到来日が同日である点から、史料三、史料四ともに成恒太郎のもとに届けられたと考えられ、成恒太郎が史料四の「實際の宛所」であり、史料四は史料三の「文面上の宛所」かつ「實際の宛所」であるといえる。また、書状形式という点でも書止文言が「恐々謹言」であることと無年号であることを挙げられる。これらのことから、史料四は史料三の副状である⁽¹⁸⁾と位置づけることができる。

書下が大宰府守護所下文(牒)の副状となっているのはこの例のみであるが、それが書下A型の初見であるということは、書下A型↓書下B型へと変化する書下の系譜の始点に大宰府守護所下文(牒)の副状を位置づけることができるのではないか。また、そのような書下が発生する

以前は大宰府守護所下文も時限的な内容を伝達していた可能性があるだろう。内容的には史料四だけでも召文としての機能を果たしうることから考えると、輕易な内容の伝達が府官らの連署を要し発給手続きが煩雑な大宰府守護所下文（牒）から武藤氏書下へと移行するのもある意味必然的である。

史料三と同じ十三世紀前半に、武藤氏は幕府に対して大宰府の文書との関係を「私成敗難及事者、所令進上問注記許於関東也、不相副資頼之書状、以直人一人之勘状許、被引載御下文事、若久罷成事之中、自然相交事哉候覽、如當時者、一切不覺悟、又於不相副資頼書状之直人勘状者、不足証文歟¹⁹」と述べている。これは幕府への上申文書の事例ではあるものの、大宰府官人の文書は守護武藤資頼の書状を副えることで初めて有効な文書となると主張しており、この時期守護武藤氏が発給する文書が大宰府機構を利用した文書から独立・相対化していく動きが存在したと考えられる。

第二章 大友氏・島津氏・名越氏・金沢氏の守護文書

前章でみたような武藤氏の守護文書のあり方は他の九州諸国の守護についても同様なのであろうか。本章では大友氏、島津氏、名越氏、金沢氏の発給文書を、様式と用途を中心に検討していきたい。

（1）大友氏（表Ⅲ）

大友氏は鎌倉時代を通して豊後守護であったほか、筑後守護を兼ねて

鎌倉期九州守護発給文書に関する一考察

いた時期もあった。

大友氏が用いたのは守護所下文と書下である。

【史料五】（表Ⅲ—1）

守護所下 上妻庄内今弘・地久志部・光友・北田肆箇所

可早任鎌倉中將殿御教書状、如本家宗知行之由事

右、去建永二年八月廿八日御教書今年承元貳年正月十七日到來備

者、（中略）早任御教書状、於彼肆箇所者、如本可令家宗知行也、

於此外參箇所者、任鎌倉殿御教書状、可随重仰之状如件

承元貳年正月十七日

左衛門尉藤原在判

史料五は「守護所下」と書き出しているように守護所下文である。大友氏の守護所下文は書止文言等に若干の相違があるものの四通あり、承元二（一二〇八）年から寛喜二（一二三〇）年までの期間にみる事ができる。これは能直と親秀の守護在任期間に相当する（表Ⅲ—1、4）。一方、書下は守護所下文が見られなくなった後の仁治三（一二四二）年以降幕末までの間に三十八通確認され、書下A型、書下B型、書下C型、書下E型がみられる。

【史料六】（表Ⅲ—5）

豊後國住人帆足兵衛尉廣道与舎兄清三郎家近・同清五郎道國（改綱字用國字）等相論親父道西遺領事

右、今年二月十八日関東御下知状云、家近終不被免道西不孝之間、於父遺領者、非領知之仁、至母遺跡鳥羽多・菖蒲佐古者、可令家近知行、次道國事、先度以家近所分給道西遺領五分一、為鳥羽多・菖

蒲佐古之替、道國可令領掌也、於所残者、廣道守親父道西讓、可致沙汰云々、(取意略之、所詮守状、可致廣道沙汰之状如件)

仁治三年三月廿六日

散位藤原朝臣在判

【史料七】(表Ⅲ—7)

豊後國野上村和与事、守今年五月六日關東御教書、可令存給、仍執達如件

文永七年六月十四日

前出羽守(花押)

野上後家殿

史料六は書下E型である。この類型は一通のみ存在し、書下の初見となつてゐる。また、史料七は大友氏の書下の中で最も多い書下B型で、文永六(一二六九)年から幕末まで三十通みられるが、その内二十六通が史料七と同様、書下年号、署判が「官途(沙彌)+花押」となつていて、数量上は大友氏が発給した書下の主要な形式となつてゐる。上記の他に書下A型が五通(表Ⅲ—8・22・26・35・37)、書下C型が二通(表Ⅲ—13・36)確認されるが、これらの書下は大友頼泰以降に発給されてゐて、守護所下文の発給時期とは重ならないが、各類型の発給時期は混在してゐて武藤氏のように様式の変遷を跡付ける事はできない。

文書の用途をみると、裁許や安堵など権利を付与する内容に関わるのは守護所下文と書下E型であり、書下E型を除く書下は、主に召文・問状や異国警固番役催促など時限的な用途に用いられてゐる。なお、書下B型と書止文言のみが異なる書下C型は、金沢氏の項でも述べるように守護代など守護の被官に宛てて指令を発する際(遵行命令)に発給され

るといふ特徴がある。

以上の検討から大友氏発給文書の特徴として、①権利を付与する内容は守護所下文と書下E型によつて伝達されるものの十三世紀前半に限定してみられること、②時限的な内容の文書は、書下年号、署判が「官途(沙彌)+花押」となる形式の書下B型が主に用いられ、権利付与の文書より遅れて登場するが幕末までみられることがあげられる。これは先に検討した武藤氏と類似した傾向であるといえる。

(2) 島津氏(表IV²⁰)

島津氏は建久八(一一九七)年に薩摩・大隅・日向の守護に任命されるが、建仁三(一一〇三)年に比企氏の乱に縁座して三ヶ国の守護を改易される。しかしその二年後に薩摩守護に還補されて以後、幕末まで薩摩守護職を相伝した。

島津氏は奉書と書下を用いてゐる。

【史料八】(表IV—6)

(花押)

薩摩郡内山田村の名頭職事、大蔵氏女帯証文等、可令安堵由依訴申、任文書之道理、可令領知之由、所成賜外題也、早無其煩、件村に大蔵氏を可令為居之状如件

建保六年十一月廿六日

中務丞忠俊奉

薩摩方地頭代殿

史料八は島津忠久の袖判奉書で、北条義時の指示を受けて山田村名頭

職に大藏氏女を安堵するよう地頭代に命じたものである。地頭代宛てであることから当時島津氏が兼帯していた島津庄薩摩方地頭として発給されたものといえるが、この島津庄薩摩方地頭職が薩摩守護職と不可分の関係にあったとされていることから、史料八を広い意味で守護文書として位置づけることができるだろう。このような袖判奉書は他に二通あり（表Ⅳ—4・8）、藤原親澄に阿多郡伊作庄内田地を知行させるよう阿多郡司に命じたもの⁽²³⁾、訴状の内容確認を地頭代に命じたものとなっている。

これらの奉書は建暦二（一二二二）年から宝治元（一二四七）年にかけての十三世紀前半に限ってみられ、権利の付与にも時限的な効力の内容にも用いられているが、被官である地頭代や阿多郡司（島津氏との被官関係は不明）への指示文書（遵行命令）として用いられている点が大きな特徴といえる。

書下は三十三通あつて、折紙以外のすべての類型が用いられている。

事書をもつ類型の書下E型と書下F型が所領安堵を目的として宝治元年と正嘉元（一二五七）年に発給されているが、権利を付与する内容の書下はこの二通だけである（表Ⅳ—7・9）。一方、時限的な内容である召文（表Ⅳ—23）、送文（表Ⅳ—25・27・28・30）、書状（表Ⅳ—19・29）に関しては、数も少なく類型も様々（書下A型、書下B型、書下C型、書下G型）であるのに対し、大番催促や異国警固番役催促、祈禱命令⁽²⁴⁾といった軍役に関する内容は多数あつて島津氏の当主別に次のように整理できる。

・ 忠久Ⅱ書下C型と書下D型（表Ⅳ—1・3）。この他に書下G型が一通（表Ⅳ—5）。

・ 忠時Ⅱ書下C型（表Ⅳ—10・14）。この他に書下G型が一通（表Ⅳ—15⁽²⁵⁾）。

・ 久時Ⅱ書下A型（表Ⅳ—16・18）。

・ 忠宗Ⅱ書下B型（表Ⅳ—20・22・24・26・31・33・34）。この他に書下C型が二通（表Ⅳ—32・35）。

・ 貞久Ⅱ書下B型（表Ⅳ—36）。

久時までは当主ごとに類型が異なり、また大番催促のために同日に一斉発給された文書であるので（書下G型のを除く）、別の年の大番催促であれば類型が異なっていた可能性もある。しかし、鎌倉時代後期の忠宗以降の文書は、同じ日付のものではなく、通数から判断すると書下B型（九通）が主に用いられた類型で、なかでも書下年号、署判が「官途（沙彌）＋花押」となる形式のものが七通と大半を占めている。

以上のように、島津氏の守護文書を武藤氏や大友氏と比較した場合、相違点として奉書を用いていることと守護所下文がみられないことがあるが、共通点として、権利付与に関する文書が鎌倉時代前期に限ってみられること、時限的な内容には主に書下年号、署判が「官途（沙彌）＋花押」となる形式の書下B型が用いられ、それは鎌倉時代後期になると出現するということが指摘できる。

(3) 名越氏(得宗家を含む)(表V)⁽²⁶⁾

建仁三(一二〇三)年に島津氏が薩摩・大隅・日向の守護職を改易された後、薩摩守護には北条時政が任じられた。薩摩守護はまもなく島津氏に還補されるが、大隈守護は北条義時が任じられた後、その子朝時を祖とする名越氏(朝時、時章、公時)が相伝した。名越氏は、大隅の他に筑後や肥後の守護も兼ね、北陸道にも守護職を獲得していたが、九州での守護職は弘安六(一二八三)年以前に失っている。よって蒐集した文書も同年以前のものである。なお、名越氏は守護国に対して守護―鎌倉守護所―在国守護所という指令伝達ルート⁽²⁷⁾をもち、守護所では名越氏被官が文書を発給しているが、本稿では守護の発給文書のみを検討したい。

得宗家の北条時政、義時の守護文書⁽²⁸⁾は下文と袖判奉書がみられる。時政発給文書を検討した菊池紳一氏によると、四通ある時政の守護文書のうち三通が薩摩国に関するもので(表V―1・3)、所領の安堵には下文を、守護所への遵行命令には奉書を用いているとされる⁽²⁹⁾。また、義時の発給文書は奉書一通のみだが(表V―4)、地頭職をめぐる相論を裁許した將軍家政所下文を施行して守護所⁽³⁰⁾への遵行命令であることから、奉書に対する菊池氏の整理は義時期にも当てはまるといえる。

義時に続く名越氏は、奉書、下知状、書下A型⁽³¹⁾、書下F型⁽³²⁾がみられる。

【史料九】(表V―9)

(花押)

兵部房圓暹訴申大隅国禰寝院南俣名主職事、訴状折紙被遣之、委旨

載状、為○召尋両方子細、可令召進彼論人清重法師後家女并清綱等給之由所候也、仍執達如件

天福二年十一月九日

藤原宗康奉

平右衛門尉殿

【史料十】(表V―5)

『正文在家蔵』

大隅国禰寝院南俣院地頭職事

右職者、貞応三年十月廿七日曾木太郎重能(中略)訴申之間(中略)見合両方証文之所、建保五年於問注所、彼是对決之後、就勘状同年八月賜政所下文之上、貞応三年四月又自大夫殿賜安堵之御下知畢、其上不及問注歟、仍於件職者、清重法師男清綱如元無相違可領掌之、但有此外之子細者、可尋札之状、下知如件

嘉祿元年八月 日

散位平(花押)

史料九のような奉書は寛喜元(一二二九)年から正嘉元(一二五七)年にかけて六通あり(表V―7・11・15)、朝時、時章期に発給されているが、袖判を据えているのは朝時のみである。用途をみると守護所職(調所職、調所書生職、政所職)の安堵や裁許、訴訟審理の指示、大隅への帰国命令となっており、権利の付与と時限的な内容の双方に用いられていることがわかる。奉書は宛所がない一通を除き、いずれも守護所の被官にあてて遵行を命じる内容で、奉書のこのような用法は、時政から連続したものとして理解できる。

一方、史料十は「下知如件」で結ばれているように下知状で、嘉祿元

(一二二五)年と正嘉二(一二五八)年の朝時と時章が各一通発給しているほか(表V—5・16)、朝時期に加賀国守護としてのものが一通みられる(表V—参考)。これらの下知状にはいずれも事書きがあり、奥に位置する署判が「官途+姓+花押」となるなど形式が定まっている。

また、その用途は裁許や和与であるが、奉書が主に守護所所職に関する裁許や安堵であつたのに対し、下知状は地頭職や所領の相論の裁許である。本来かかる裁許は執権や探題が下知状によつて行ふ内容であつて、ここに従来指摘されることの多い名越氏の独自性を見いだせるが、その独自性とは守護でありながら執権や探題に比する存在であるということができるだろう。

【史料十一】(表V—12)

可令早深堀左衛門尉能仲、筑後国甘木村(東西)、深浦村地頭職事

右人、任今年十月廿三日御下文之^旨□、為承久勲功之替、守先例、可令致其沙汰之状如件

建長二年十一月三日

前尾張守平(花押)

史料十一は、書下F型で、時章、公時期に四通みられる(表V—12、14・17)。すべて書下年号、署判が「官途+姓+花押」であり、先にみた下知状との相違点は書止文言のみである。用途は裁許や安堵に関する幕府文書の施行と守護使乱入の停止を命じるものとなっている。

以上のように、名越氏の発給文書はこれまで検討してきた他の守護と

鎌倉期九州守護発給文書に関する一考察

は大きく異なるものであるが、この違いをどう理解したらよいだろうか。名越朝時の弟で六波羅探題でもあつた信濃守護北条重時と比較すると、重時発給文書には下知状こそ確認できないものの奉書と書下がみられる。⁽³²⁾⁽³³⁾

【史料十二】(市河文書『鎌』三四〇六)

(花押)

春近領内志久見郷守護所使入部事、被止候了、但謀叛・殺害・夜討・強盜・放火・刃傷、如此犯科之輩出来之時者、於其所之堺、可令請取犯人給候、存此旨可沙汰候之由候也、仍執達如件

嘉祿元年九月十六日

尾張允奉之

謹上 藤内右衛門尉殿

【史料十三】(守矢文書『鎌』六七七)

信濃國筑摩郡白河郷(諏方上社領)地頭職事

右、任今年十一月七日関東御下文之旨、藤原惟家可令為彼職之状如件

寛元四年十二月九日

相模守平朝臣(花押)

守護重時が袖判を加える奉書は二通あり、いずれも史料十二のように守護所の被官に宛てて守護の指令を伝える内容となつていて、名越氏の奉書と同様の様式や用途といえる。

また、二通ある書下は書下E型と史料十三のような書下年号、署判「官途+姓+花押」という形式の書下F型であること、いずれも地頭職

安堵の関東下文の施行に用いられていることなど、名越氏の書下と様式や用途に類似性を指摘できるのである。

少ない例ながら北条重時の守護文書との共通性がみいだされることは、この時期の有力北条一門がこのような奉書と書下を用いて守護職権を行使していた可能性が高いと考えられる。下知状の使用に独自性がみられるものの、守護としての名越氏は有力北条一門の一つとして守護職権を行使する存在であつたと位置づけることができるだろう。

(4) 金沢氏(表VI)⁽³⁴⁾

建治元(一二七五)年に鎮西に下向した金沢実政以降、金沢一門は鎮西探題のほか九州内で最大四カ国の守護職を歴任し、幕府滅亡時にも豊前・肥後の守護職を得ていた。

金沢氏の守護文書で留意しなければならない点は、鎮西探題が兼補する守護国(肥前、豊前)へ宛てた文書の扱いである。当該国への発給文書が守護の立場として発給されたのか探題の立場として発給されたのかを判断することが困難なため、探題兼補国については守護代の発給文書を、探題兼補となっていない国は守護正員(大隈守護金沢時直、肥後守護規矩高政)と守護代の発給文書を検討したい。

守護正員の発給文書は八通あり、書下B型(表VI—8・26・27)と書下C型(表VI—12・15・20・22・28)がみられる。

【史料十四】(表VI—26)

相良三郎入道蓮佛女子尼妙阿申、肥後國人吉庄南方刀岡名地頭職安

堵事、去年十一月廿三日御教書(副申状具書)如此、早任被仰下之旨、云當知行實否、云支申仁有無、載起請之詞、可被注申也、仍執達如件

嘉暦二年五月十日

掃部助(花押)

相良六郎三郎入道殿

【史料十五】(表VI—20)

大隅国台明寺雜掌敷建申下部次郎判官代牛太郎以下輩、得六郎兵衛尉惟村語、乱入當寺領止上村、致追捕狼藉由事、解状(副具書)如此、事實者、太不穩便、早可令停止彼輩乱入狼藉、若又有子細者、可被注進交名人等之状如件

正和元年十月二日

前上総介御判

守護代

史料十四、史料十五はそれぞれ書下B型、書下C型の例であるが、書下B型、書下C型の八通のうち五通が書下年号、署判「官途十花押」という形式となっていて、これまで検討してきた守護と同じ傾向となっている。また、権利を付与する内容のものではなく、すべて時限的な内容であるが、書下B型が鎮西探題御教書を施行しての寺社への祈祷命令や御家人への当知行確認命令であるのに対し、書下C型では宛所がない一通を除き守護代か地頭代に宛てて狼藉停止や所務沙汰・検断沙汰の沙汰し付け、論人の催進を命じるものとなっている。大友氏でも守護被官宛てのものは書下C型が用いられていたように、宛所によって書下B型と書下C型が使い分けられていたといえる。

一方、守護代の発給文書は二十一通あり、書下A型、書下B型、書下G型がみられる。残存数は書下B型が十五通と最も多く(表VI—1) 5・7・9・11・13・16・19・21)、このうち守護正員や他の守護で多くみられた書下年号、署判が「官途(沙彌)+花押」という形式が約半数の七通を占めている。

用途は、警固番役催促や祈祷命令などの軍役催促の他、召文・問状や囚人預状、注進指令、検断沙汰の遵行命令等に使われ、守護正員と同じく権利を付与する内容のものはない。なお、書下A型は五通あつて神馬送文と警固番役催促に(表VI—6・23・25・29)、書下G型は囚人預状にみられる(表VI—14)。

このように金沢氏の守護正員と守護代はともに書下年号、署判「官途(実名)+花押」となる形式の書下B型を主に用いていたが、このような書下B型とその用途は、武藤氏、大友氏、島津氏が鎌倉時代後期に用いたものと一致しており、これに大友氏でもみられた宛所による書下B型と書下C型の使い分けを含めると、当時、九州内で大きな勢力を得ていた金沢一門の守護としての立場は、これら外様の九州守護たちと異なる事はなかったといえる。また、一般的に守護被官とされる守護代も文書様式上は、守護正員と同じ立場で管内の武士や寺社に臨んでいたといえる。

第三章 発給文書からみた九州守護と鎌倉幕府

前章までの内容を整理し、鎌倉時代の守護文書について簡単にまとめ

鎌倉期九州守護発給文書に関する一考察

ておこう。

用途面の特徴として、召文・問状などの訴訟事務、警固番役や祈祷命令などの軍勢催促、法令の伝達といった時限的な内容は、鎌倉時代を通じてみられるのに対し、所領安堵や裁許など権利の付与に関わる内容は鎌倉時代前期に限って発給されている点があげられる。権利付与に関する文書が本来残されやすいものであることを考えると、このことは、文書の残存状況に起因するものではないと思われる。

所職の安堵や裁許に関わる文書は、ほとんどが関東下文や関東下知状を施行することで発給されているが、その様式が「鎌倉時代から南北朝時代にかけて最上格の文書」⁽³⁶⁾とされる下文(武藤氏、大友氏)や事書きをもつ下文に近い様式の書下E型(大友氏、島津氏)、書下F型(名越氏)であることは、こうした守護の施行が単なる文書伝達上の中継ぎなどではなく、守護の施行文書も関東下文などともに権利の認定機能を果たしていたことを示している。

鎌倉時代前期の守護は、こうした権利認定に関わる位置づけであったといえるが、鎌倉時代後期になると、所領安堵の関東下文は鎮西探題へは伝達されるものの、⁽³⁷⁾それを守護が施行する例はなく、また所務沙汰を管轄する鎮西探題の裁許状を守護が施行している文書もみられないように⁽³⁸⁾、鎌倉時代後期の守護は所職の補任や安堵、それに所務沙汰の裁許といった所領支配に関する事項には関与しなくなり、九州守護に特有の権限である検断沙汰や雑務沙汰の裁判権を別にすれば、その職権は大犯三ヶ条に示されるような軍事警察権と問状や召文などの訴訟事務に限定さ

れていったといえる。権利付与を担う役割から守護を外し、軍事警察権と訴訟事務を行使する機関へと限定したことは、守護職を吏務的な職として位置づけ、国内武士との被官関係の構築を制限するという意図もさることながら、鎮西探題と守護との間に裁判管轄が設定されたことに、探題と守護のそれぞれの権能の集中化を読み取る外岡慎一郎氏の見解と同じ視点で理解することもできるだろう。

次に、様式面の特徴としては、鎌倉時代前期は守護により異なっていた文書様式が、鎌倉時代後期になると、書下年号で署判が「官途十花押」(一部「実名十花押」となる形式の書下B型を各守護が共通して用いるようになるという点がある。また、守護代などの守護被官が宛所となる場合には、大友氏と金沢氏では書止文言が「之状如件」である書下C型が用いられていたが、これはおそらく他の守護でも共通した用法であったと考えられる。⁽⁴²⁾

時代を経るにしがたい、文書様式が整理されてくることはある意味必然的であるにしても、なぜ各守護が共通した文書様式をもち、それが書下B型であったのであろうか。可能性の一つとして考えられるのは他の幕府関係文書の影響である。鎮西探題は書下B型の出現後に設置されているので、守護の上級機関ではあるが同じく鎌倉幕府の地方機関である六波羅探題の発給文書との比較を試みてみよう。

六波羅探題発給文書は、熊谷隆之氏によって様式の分類や確立過程が明らかにされている。⁽⁴³⁾氏は様式の確立過程を三つの時期にわけ、仁治三(一二四二)年から建治二(一二七六)年までの第二期に幕末まで存続

する様式の「後期下知状」、「後期書下」、「御教書」が出現するとされた。

「後期下知状」は主に裁許状に、「後期書下」(事書があり、書止文言「状如件」、署判が奥に位置して宛所がないもの)は「施行、禁制、裁許」に、そして第二期の「御教書」(事書がなく、書止文言「状件如」または「仍執達如件」、日下に署判、差出は官職と花押のみを記すものが多い)は、「訴訟事務をはじめ、さまざまな用途に用いられる」とされる。

さらに「御教書」は書止文言が「仍執達如件」の場合、「守護代」、「地頭代」などへ単独で宛てたものはみえず、「宛所の人物は訴人や論人、守護・使節らの御家人が大部分」であるのに対し、書止文言が「状件如」のものは、「宛所には御家人らの名もみえるものの「守護(所)代」「地頭代」と記されるものが、三二通中一七通を占める」という。⁽⁴⁴⁾

裁許等に用いられた「下知状」と「後期書下」はここでは措くとして、このような六波羅探題の「御教書」が、用途や様式の細部そして宛所による書止文言の使い分けに至るまで、鎌倉時代後期に守護が用いた書下B型と書下C型に類似していることに気がつく。熊谷氏のいう第二期に整備された六波羅探題の文書様式が幕末まで継続して使用されることで、守護や鎮西探題などの幕府の地方機関の文書体系に影響を与えたことは十分考えられる。

六波羅探題の文書体系が「直輸入」されたとするには慎重でありたいが、『沙汰未練所』に各種訴訟関係文書のひな形が示されているように、体系的に整備された六波羅発給文書を基にして、何らかの形で幕府地方機関の発給文書の見本が示され、それを受け入れることができるように

なった守護から順次用いられるようになっていったのではないだろうか。そのことにもっとも大きな影響を与えた出来事は、鎮西談義所の設置を経て鎮西探題の設置によって、幕府が九州地方において「純粹な自己の支配体制を確立」⁽⁴⁶⁾したことであろう。

本稿で検討した守護の発給文書のすべてがきつちりと書下B型や書下C型に分類されるわけではないものの、文書様式が幕府の様式として定式化されたことは、守護の個性に関わりなく常に一定の関係が守護と御家人との間に設定されたことを意味する。守護の代替わりや守護家の交代があつても、文書上は、発給者と受給者の関係が変化せず、引続き定型の様式で受給者へ指令を発する事が可能になったことで、モンゴルに対する軍事的緊張が続く鎌倉時代後期の九州における強力かつ安定した軍事動員体制の構築に大きく寄与したものと思われる。

定式化された文書様式によって意思伝達を行う統治組織としての鎌倉幕府は、鎌倉時代前期の九州には成立しておらず、十三世紀後半から十四世紀初頭にかけてようやく地方組織に至るまで自己の文書体系による九州統治を完成させることができたといえる。

かつて石母田正氏は、守護を中核として編成された組織的武力が幕府権力の中核であり、そのためには、守護体制が領域的に編成されていることが重要で、「個々の御家人は人格的隷属関係によって個別的に鎌倉殿に臣従関係を結んでいるが、かれらを組織された武装力として編成する仕方は、「国」という領域的・行政的な原理、つまり非人格的な原理にもとづいて」いること、この点が、鎌倉幕府を国家権力たらしめている

る一つの特徴であるとされた。⁽⁴⁷⁾

鎌倉にある幕府の中央機関や六波羅探題といった主要地方機関のみならず、一国ごとに設置された守護までが、定式化された非人格的な文書形式での運営執行が志向されていたところに、鎌倉幕府が国家権力として成熟していった一面が読み取れるのではないだろうか。

おわりに

九州地方に限ってではあるが、鎌倉幕府の守護発給文書の概要をある程度は示すことができたのではないだろうか。ただ、本稿で蒐集した守護文書についてはまだまだ不完全なもので、蒐集もれや比定の誤りなどが多く想定される。大方のご批判、ご教示を仰ぎたい。

注

(1) 佐藤秀成「六波羅探題発給文書の伝達経路に関する若干の考察」『古文書研究』四一・四二合併号、一九九五年、加藤克「六波羅奉行国」に関する一考察『北大史学』三七号、一九九七年、久保田和彦「六波羅探題発給文書の研究―北条泰時・時房探題期について―」『日本史研究』四〇一号、一九九六年、同「六波羅探題発給文書の研究―北条重時・時盛探題期について―」(鎌倉遺文研究会編『鎌倉遺文研究Ⅰ 鎌倉時代の政治と経済』東京堂出版、一九九九年)、熊谷隆之「六波羅探題発給文書に関する基礎的考察」『日本史研究』四六〇号、二〇〇〇年。

(2) 瀬野精一郎「京都大番役勤仕に関する一考察」『東京大学史料編纂所報』一九七四年、五味克夫「薩摩国御家人の大番役勤仕について―付、

宮里郷の地頭・郡司・名主等について」(『日本古文書学会編『日本古文書論集6 中世Ⅱ』吉川弘文館 一九八七年)、川添昭二「覆勘状について」(同)、荻野三七彦「挙状と覆勘状」(同)。

- (3) 菊池紳一「北条時政発給文書について―その立場と権限―」(『学習院史学』十九 一九八二年)、下山忍「北条義時発給文書について」(安田元久先生退任記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相 下』吉川弘文館 一九八九年)、湯山賢一「北条時政執権時代の幕府文書―関東下知状成立小考―」(小川信編『中世古文書の世界』吉川弘文館 一九九一年)、川添昭二「北条時宗文書の考察―請文・巻数請取・書状―」(『鎌倉遺文研究』2 一九九八年)、細川重男「得宗家公文所と執事」(『鎌倉政權得宗専制論』吉川弘文館 二〇〇〇年)。

- (4) この他に、守護文書を扱った研究として次の諸論文がある。外岡慎一郎「鎌倉幕府指令伝達ルートの一考察」(『古文書研究』第二二号 一九八三年)、海津一朗「中世武家流刑の続き文書」(『古文書研究』第三七号 一九九三年)、西田友広「鎌倉幕府の検断訴訟手続きと注進状」(『古文書研究』第六四号 二〇〇七年)等。

- (5) 佐藤進一『新版 古文書学入門』一五七頁(法政大学出版局 二〇〇三年)。なお、日本古文書学会編『概説古文書学 古代・中世編』一二六頁(吉川弘文館 一九八三年)にもほぼ同様の記述がみられる。

- (6) このような様式分類に際して、熊谷隆之氏が行った六波羅探題発給文書の分類方法を参考にした(註(1) 熊谷論文)。

- (7) 以下、守護職の沿革については次の諸論文によった。佐藤進一『増訂鎌倉幕府守護制度の研究』東京大学出版会 一九七一年、川添昭二「鎌倉時代の筑前守護」、「鎌倉時代の筑後守護」(『九州中世史の研究』吉川弘文館 一九八三年)、同「鎌倉時代の大隅守護」(『金沢文庫研究』十七―三 一

九七一年)、村井章介「蒙古襲来と鎮西探題の成立」(『アジアの中の中世日本』校倉書房 一九八八年)、伊藤邦彦『鎌倉幕府守護の基礎的研究』岩田書院 二〇一〇年。

- (8) 佐藤進一『鎌倉幕府訴訟制度の研究』畝傍書房 一九四三年、石井進『日本中世国家史の研究』岩波書店 一九七〇年。

- (9) 袖判がないものや府官の連署が目下にあるものがあるが、それらは正文ではないため、筆写時の過誤と思われる。ただし、表Ⅰ―1は正文だが袖判がみられない。

- (10) 嘉元二(一三〇四)年の大宰府守護所下文(表Ⅰ―28)は、様式上の疑義はないが発給時期が他の大宰府守護所下文(牒)とは大きく異なり、川添昭二氏は当文書を「内容上吟味を要する点もある」(前掲註(7)「鎌倉時代の筑前守護」とされている。表Ⅰ―28を例外的な存在と考え、文書の真偽については後考を俟ちたい。

- (11) 送状や請取状さらに書状的な内容を持つもの(表Ⅱ―1・3・4・5・7)については、様式が一定ではない。また、弘安十年を初見とする五通の折紙文書は(表Ⅱ―30・33・35・38・47)、すべて事書きがなく、付年号(初見文書は書下年号)、署判が「実名+花押」となっている。書止文言は「仍執達如件」と「之状如件」の二種類が見られるが、後者はいずれも守護代宛てで、後述するように宛所による使い分けと考えられる。

- (12) 「仍執達如件」という奉書形式の書止文言から御教書と考えるもあるが、「依仰」などの文言を含まずに武藤氏が発給者として現れていることや書下A型からの変化を考慮して本稿では書下として分類した。

- (13) 書下A型に付年号のものが四通あるが(表Ⅱ―11・12・13・16)、すべて正文ではないこと、「文応元年」のように筆写時の追記と考えられる形跡があるものもあること、同時期の他の文書が無年号であることなどから正

文は無年号であつた可能性が高い。

- (14) なお書下A型でも署判が「官途(沙彌) 十花押」となるものが主であるが「実名+花押」のものも三例見られる(表Ⅱ—5・23・24)。それらは関東御教書を披見した事を伝える内容や、相論の経過説明であるなど書状的な内容となっている。

- (15) 表Ⅱでは年次比定ができない無年号文書を便宜上『鎌倉遺文』(以下『鎌』と表記)の番号順に配列したが、無年号から書下年号への形式変化を考慮すると無年号文書の表Ⅱ—26は、建治二(一二七六)年以前のものと考えられる。

- (16) この点、柴坂直純「鎮西における鎌倉幕府の寺社造営について—宇佐八幡宮造営奉行人の分析を中心として—」『論究』中央大学大学院文学研究科 篇 十九—一 一九八七年)にも同様の指摘がある。

- (17) 上杉和彦『日本中世法体系成立史論』三三六頁(校倉書房 一九九六年)。
(18) なお日付が異なっている点に関しては、史料三に府官が連署を要した日数やその後史料三が守護の許に届けられ、史料四が作成されるまでの日数を想定することができる。

- (19) 「青方文書」安貞二年三月十三日関東下知状案(『鎌』三七三二)。

- (20) 守護として発給したのが不明な島津氏当主の発給文書は表Ⅳには含めず検討の対象とはしていない。次に記し大方のご教示を得たい。「有馬文書」建長六年五月二十八日(『鎌』七七五三)、「有馬文書」正安三年十二月十一日(『鎌』二〇九二〇)、「島津家文書」文保三年二月五日(『鎌』二六九四七)、「安養院文書」元亨三年十二月十一日(『鎌』二八六一〇)。

- (21) 「島津家文書」(建保六年)十月二十七日北条義時書状案(『鎌』二四〇七)。

- (22) 海老澤衷「島津荘内薩摩方地頭守護職」と薩摩国の荘園公領制(『荘園公領制と中世村落』校倉書房 二〇〇〇年)。

鎌倉期九州守護発給文書に関する一考察

- (23) 地頭代宛てではないが、事書きの有無という相違があるものの史料八と同じ文章構成であり、島津庄薩摩方地頭職として発せられたものである可能性が高いと考えられる。

- (24) 祈禱命令を軍役として扱うことについては、川添昭二「蒙古襲来と中世文芸」(『中世文芸の地方史』平凡社 一九八二年)等を参照。

- (25) 発給年不詳であるが、弘長三(一二六三)年発給とする五味克夫氏による推定(前掲註(2) 五味論文)に従い忠時期とした。

- (26) 表Ⅴ作成にあたり前掲註(3)の諸論文と田中健二「鎌倉幕府の大隅国支配についての一考察—守護所と国衙在庁を中心に—」(『日本古文書学会編『日本古文書学論集』5 中世I 吉川弘文館 一九八六年)、秋山哲雄「北条氏一門と得宗政權」(『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館 二〇〇六年)を参考にした。

- (27) 前掲註(26) 田中論文、秋山論文。

- (28) 北条時政、義時発給文書については、前掲註(3)の菊池、下山、湯山論文を参照。なお、湯山氏は表Ⅴ—1を北条氏の私領あてのものとして守護文書とはされていないが、本稿では守護文書として検討の対象とした。

- (29) 前掲註(3) 菊池論文。

- (30) 表Ⅴ—2には、後筆と思われるが宛所の脇に「当国守護所」と記されている。

- (31) 書下A型は史料十の副状として一通だけ存在するので個別検討は行わない。

- (32) 「市河文書」嘉祿元年九月十六日(『鎌』三四〇六)、寛喜元年十二月十三日(『鎌』三九〇八)。なお『鎌』の文書名はそれぞれ「北条重時書下」、「北条重時御教書」であるが、井原今朝男「北条重時袖判奉書と訴陳状の裏花押」(『日本歴史』第六二三号 二〇〇〇年)によると、いずれも「尾張允」

が奉じた重時の袖判奉書であるので、史料十二もこれに拠り改めた。

- (33) 「市河文書」嘉禄元年九月九日『鎌』三四〇三、「守矢文書」寛元四年十二月九日『鎌』六七七二。なお『鎌』では、後者の文書名を「六波羅施行状」とするが、信濃国が六波羅探題の管轄国ではないことから、信濃国白河郷地頭職を安堵する將軍家下文を施行する当文書は、信濃守護の職権によるものと考ええる。同じく前者は「北条重時下文」とされているが、書出や書止文言に「下」や「故下」などという文言はないことから、下文ではなく書下である。

- (34) 表VI作成にあたり、特に守護代発給文書については前掲註(7)村井論文を参考にした。

- (35) 前掲註(7)村井論文。

- (36) 前掲註(5)佐藤著書一一九頁。

- (37) 鎮西探題が関東下文や外題安堵を施行した例は次のとおり(文書名は『鎌』による)。「阿蘇文書」正安二年九月六日鎮西施行状(『鎌』二〇五九二)、「深江家文書」正和四年五月十二日鎮西御教書(『鎌』二五五〇七)、「根津美術館所蔵文書」正和五年二月二十二日鎮西下知状(『鎌』二五七五〇)、「池端文書」元亨四年七月五日鎮西下知状(『鎌』二八七八一)、「麻生文書」嘉暦二年十二月十六日鎮西御教書(『鎌』三〇一〇五)、「小鹿嶋文書」嘉暦三年三月二十日鎮西施行状案(『鎌』三〇二二〇〇)等。

- (38) 前掲註(8)佐藤著書。

- (39) 幕府や探題の発した文書を守護が施行する場合は、異国警護催促や祈禱命令など軍事警察権にかかわる内容に限られている。

- (40) 前掲註(8)佐藤著書。

- (41) 「鎮西探題と九州守護」『敦賀女子短期大学敦賀論叢』十一号 一九九六年。

- (42) 武藤氏は、折紙の書止文言に「之状如件」と「仍執達如件」を用いるが、守護代あての場合には「之状如件」となるなど大友氏や金沢氏の書下B型と書下C型と類似した関係となっている。

- (43) 前掲註(1)熊谷論文。

- (44) 六波羅探題発給文書のこのような書止文言の使い分けは、前掲註(1)佐藤論文でも指摘されている。なお、鎮西探題発給文書にも同様の使い分けがみられる(栗林文夫「鎌倉時代の日向国守護について」『日本歴史』五二七号 一九九二年)。

- (45) その一つ「催促状書様事」として書下A型または書下B型の召文がひな形として示されている(宛て先によって書止文言「恐々謹言」と「仍執達如件」を使い分けるとされている)。

- (46) 前掲註(8)石井著書三七四頁。

- (47) 石母田正「解説」『中世政治社会思想 上 日本思想体系』岩波書店 一九七二年。

〔付記〕本稿の一部は、第三十二回日本古文書学会大会(一九九九年)において口答発表したものである。

表1 武藤氏(大宰府守護所下文・牒)

No	西暦	年/月/日	国名	守護	袖判	宛所	事書	書止文言	年号	署判	正文	内容	施行	様式	『録』番号	備考
1	一一〇六	建永一/一〇/一五	肥前	資頼無		武雄社衛	有	仍以牒送如件	有	奥	〇	裁許	〇	牒	一六四四	
2	一一一五	建保三/一〇/九	肥前	資頼有		肥前國武雄黒髪両社衛	有	之狀如件以	有	奥	〇	安堵・補任	〇	牒	二二八四	
3	一一一七	建保五/一/二二	肥前	資頼無		豊前國住人田部太子	有	之狀如件	有	奥		裁許	〇	下文	二二八五	
4	一一二二	貞応一/七/九	肥前	資頼無		藤木村住人等	有	之狀如件	有	奥		裁許	〇	下文	補七八〇	後欠
5	一一二二	貞応一/二/二三	肥前	資頼有		石志次郎潔	有	之狀如件	有	奥		裁許		下文	三〇三二	「署判」を 史料集に 訂正
6	一一二四	貞応三/六/一六	肥前	資頼無		宇野御厨	有	仍以牒送如件	有	奥	〇	安堵・補任	〇	牒	補八四八	
7	一一二五	嘉禄一/一二/二三	豊前	資頼有		宇佐宮衛	有	以牒	有	奥	〇	裁許	〇	牒	三四四四	
8	一一二六	嘉禄二/九/一四	筑前	資頼有		家上五郎別当光友	有	之狀如件	有	奥		過所		下文	三五二三	
9	一一三一	寛喜三/四/一六	肥前	資頼無		宇野御厨衛	有	牒送如件以	有	奥	〇	安堵・補任	〇	牒	補一〇三一	
10	一一三二	貞永一/閏九/九	豊前	資頼有		成恒大三郎国守	有	之狀如件	有			訴訟事務	〇	下文	四三八五	後欠
11	一一三三	貞永二/一/二二	肥前	資頼無		綾部庄	有	之狀如件	有			安堵・補任	〇	下文	補一一〇六	の文書の一部分
12	一一三三	天福一/一/一八	肥前	資頼有		一王房隆顯	有	之狀如件	有	奥	〇	安堵・補任	〇	下文	四五七四	
13	一一三七	嘉禎三/一〇/一一	肥前	資頼有		藤原能門	有	之狀如件	有	日下		安堵・補任	〇	下文	五一八三	
14	一一三八	嘉禎四/一〇/三〇	肥前	資頼有		山代三郎固後家尼法阿弥陀仏	有	之狀如件	有	奥	〇	裁許	〇	下文	五三一七	「署判」を 史料集に 訂正
15	一一三九	延応一/九/二〇	肥前	資頼有		山代固後家尼	有	之狀如件	有	奥	〇	裁許	〇	下文	五四七六	
16	一一四一	仁治一/一〇/一五	肥前	資頼有		大河五郎幸則	有	之狀如件	有	日下		裁許	〇	下文	五九四三	
17	一一四一	仁治一/一〇/一二	肥前	資頼無		伊福三郎道行口	有	之狀如件	有	日下		裁許	〇	下文	五九六〇	後欠
18	一一四四	寛元二/八/一八	肥前	資頼有		山代三郎固後家尼	有	之狀如件	有	奥	〇	裁許	〇	下文	六三六三	
19	一一四七	宝治一/一/一五	肥前	資頼有		藤原勝丸	有	之狀如件	有	奥	〇	安堵・補任	〇	下文	六八九六	
20	一一五二	建長四/一〇/二二	豊前	資頼無		中原氏へ住江太郎宇佐嗣輔後家	有	之狀如件	有	日下		安堵・補任	〇	下文	七四八六	
21	一一五三	建長五/一二/八	肥前	資頼有		藤原資朝	有	之狀如件	有	奥	〇	安堵・補任	〇	下文	七六五三	
22	一一五五	建長七/五/二三	肥前	資頼有		肥前國戸八浦住人	有	之狀如件	有	奥	〇	安堵・補任	〇	下文	七八七三	
23	一一五七	康元二/二/一一	肥前	資頼有		國分次郎忠俊	有	之狀如件	有	奥	〇	安堵・補任	〇	下文	八〇七五	
24	一一六〇	文応一/六/一七	肥前	資頼有		肥前國松浦庄石志村住人	有	之狀如件	有	奥	〇	安堵・補任	〇	下文	八五三〇	
25	一一七二	文永九/一/二九	筑前	資頼有		宗像宮衛	有	牒送如件以	有	奥	〇	裁許	〇	牒	一一五一	

鎌倉期九州守護発給文書に関する一考察

28	二二七四 文永二一／六／一四	肥前	資能有	大江通忠	有	之状如件	有	奥	○	安堵・補任	○	下文	『松浦等閑 史料集』	
27	二二七九 弘安二／二／二〇	筑前	経資有	宗像彌松丸	有	之状如件	有	奥	○	安堵・補任	○	下文	一三八〇三	
26	二二七四 嘉元二／八／二	筑前	盛経有	佐伯守繼	有	之状如件	有	奥		過所		下文	二一九二九	

表II 武藤氏(書下)

No	西曆	年／月／日	国名	守護	袖判	差出	宛所	事書	書止文言	年号	署判	正文	内容	施行	様式	『録』番号	備考
1	一一三〇	寛喜二／五／九	豊前	資能無		右衛門尉藤原	(なし)	無	如件	書下	日下		送文	○	G型	三九八八	
2	一一三二	(貞永一) 閏九／一七	豊前	資能無		右衛門尉	成恒太郎殿	無	恐々謹言	無	日下		召文・問状(訴訟関係)	○	A型	四三八七	
3	一一三九	延応一／一〇／二四	肥前	資能無		前豊前守	(なし)	有	所請取如件	書下	日下		請取状		G型	五四九〇	
4		(延応一カ) 一〇／二九	肥前	資能無		前豊前守	石志次郎殿	無	請取候訖	無	奥		請取状		G型	五四九二	「署判」を 史料集』によ り訂正
5	一一四七	(宝治一) 三／四	肥前	資能無		資能	武雄大宮司殿	無	恐々謹言	無	日下		関東御教書披見		A型	六八一六	
6	一一四九	(建長一) 七／二七	肥前	資能無		前豊前守	長瀬南三郎殿	無	謹言	無	日下		法令伝達	○	A型	七〇九四	
7	一一五八	(建長一カ) 九／二九	豊前	資能無		資能	田口馬允殿	無	(書止略)	無	日下		関東御教書披見		G型	七二二四	
8	一一五八	(正嘉二) 四／二四	豊前	資能無		少貳	山田左衛門入道殿	無	恐々	無	日下		召文・問状(訴訟関係)	○	A型	八二五四	
9	一一六〇	(正元一) 三／一一	肥前	資能無		前豊前守	(なし)	無	恐々謹言	無	日下		訴訟に関する返信		A型	八二五四	
10	一一六〇	(正元一) 三／一一	肥前	資能無		少貳	平戸又五郎殿	無	恐々謹言	無	日下		法令伝達	○	A型	八四八六	
11	一一六〇	文応一／七／二〇	肥前	資能無		少貳	青方二郎殿	無	恐々謹言	付	日下		法令伝達	○	A型	八五四〇	前欠
12	一一六〇	文応一／七／二〇	肥前	資能無		少貳	青方二郎殿	無	恐々謹言	付	日下		法令伝達	○	A型	八五四一	
13	一一六一	弘長一／四／二	肥前	資能無		少貳	青方二郎殿	無	恐々謹言	付	日下		法令伝達	○	A型	八六四二	
14	一一六一	(弘長一) 六／三	肥前	資能無		少貳	武雄大宮司殿	無	恐々謹言	無	日下		法令伝達	○	A型	八六四五	
15	一一六三	(弘長三) 一一／一五	肥前	資能無		少貳	武雄大宮司殿	無	恐々謹言	無	日下		法令伝達	○	A型	九〇一四	
16	一一六五	文永二／閏四／一六	筑前	資能無		少貳	(なし)	無	恐々謹言	付	日下		法令遵守要請	○	A型	九二八四	
17	一一七二	(文永二) 二／二八	肥前	資能無		沙彌	武尾大宮司殿	無	恐々謹言	無	日下		法令伝達	○	A型	一〇九八五	
18	一一七三	(文永一〇) 八／三	肥前	資能無		沙彌	山代三郎殿	無	恐々謹言	無	日下		召文・問状(訴訟関係)	○	A型	七三三二	
19	一一七三	(文永一〇) 一一／一六	肥前	資能無		沙彌	山代孫三郎殿	無	恐々謹言	無	日下		法令伝達	○	A型	一一四六八	
20	一一七三	(文永一〇) 一一／一六	肥前	資能無		沙彌	大島彌次郎殿	無	恐々謹言	無	日下		法令伝達	○	A型	一一四六九	
21		／八／八	筑前	経資無		大宰少貳	宗像入道殿御返事	無	恐々謹言	無	日下		所領注進の経過説明		A型	一一六七四	遺文一七九七 八は同文書
22	一一七六	建治二／三／一〇	肥前	経資無		少貳	深江村地頭殿	無	恐々謹言	書下	日下		軍役催促(警固番役)		A型	一一二六〇	
23	一一七六	建治二／三／一一	肥前	経資無		少貳	武雄大宮司殿	無	恐々謹言	書下	日下		異国征伐の経過説明	○	A型	一一二六九	
24	一一七七	建治三／一〇／二四	肥前	経資無		少貳	佐志久曾殿	無	恐々謹言	書下	日下		相論状況説明		A型	一一二八八	
25	一一八一	弘安四／二／一八	肥前	経資無		少貳	武尾大宮司殿	無	恐々謹言	書下	日下		軍役催促(警固番役)	○	A型	一四二五一	

No	西暦	年/月/日	国名	守護	袖判	差出	宛所	事書	書止文言	年号	署判	正文	内容	施行	様式	『鎌』番号	備考
3	一一二八	安貞二/一二/二七	豊後	親秀	無	沙彌寂秀	六郷山執行圓蒙	有	之状如件	書下	日下		裁許	○	下文	補九六一	書出(守護所下)
2	一一二三	建曆三/五/三	筑後	能直	無	守護所左衛門尉藤原	上妻庄内今弘地久志部 光友北田肆箇所	有	下知如件故	書下	日下		安堵・補任	○	下文	二〇〇六	書出(筑後国守護所下)
1	一一〇八	承元二/一/一七	筑後	能直	無	左衛門尉藤原	上妻庄内今弘地久志部 光友北田肆箇所	有	之状如件	書下	日下		安堵・補任	○	下文	一七一二	書出(守護所下)

表III 大友氏

註 NO 一一・一二・一三の「年号」を付年号としたが、「文応元年」

のように付年号では本来表記しない「年」字が書かれている。

47	一一三三	元徳四/二/一	筑前	貞経	無	妙恵	中村彌次郎殿	無	仍執達如件	付	日下	○	軍役催促(警固番役)	○	折紙	三一六七〇	
46	一一三五	正中二/九/二九	筑前	貞経	無	筑後守	中村孫四郎殿	無	仍執達如件	書下	日下		加燈錢催促	○	B型	二九二一一	
45	一一二五	元亨五/一/九	筑前	貞経	無	筑後守	志佐小二郎殿	無	仍執達如件	書下	日下		遵行命令(訴訟関係)		B型	二八八八二	
44	一一二四	元亨四/一/一八	筑前	貞経	無	筑後守	青方八郎殿	無	仍執達如件	書下	日下		召文・問状(訴訟関係)	○	B型	二八七四六	
43	一一二四	元亨四/五/一三	筑前	貞経	無	筑後守	(なし)	無	仍執達如件	書下	日下		禁制		B型	二八八八二	
42	一一二二	元亨二/五/八	筑前	貞経	無	大宰少貳	(なし)	無	仍執達如件	書下	日下	○	軍役催促(警固番役)		B型	二八〇二〇	
41	一一二二	元亨二/五/一	筑前	貞経	無	大宰少貳	(なし)	無	仍執達如件	書下	日下	○	軍役催促(警固番役)		B型	二八〇一三	
40	一一二二	元亨二/四/一	筑前	貞経	無	大宰少貳	三奈木志賀次郎殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	地子宛課禁止	○	B型	二七九四	
39	一一一六	正和五/三/一九	筑前	貞経	無	大宰少貳	福井地頭殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	軍役催促(辻固)	○	B型	二五七七三	
38	一一一六	正和五/二/一二	筑前	貞経	無	貞頼	禰定禪地頭殿	無	仍執達如件	付	日下	○	軍役催促(警固番役)	○	折紙	二五七四一	「様式」を『福岡県史料』により訂正
37	一一一五	正和四/二/一八	筑前	盛経	無	大宰少貳	怡土庄惣政所殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	訴訟事務		B型	二五六九一	
36	一一〇四	嘉元二/一/一一	筑前	盛経	無	沙彌	中村彌二郎殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	軍役催促(警固番役)	○	B型	二二五〇〇	
35	一一〇三	乾元二/閏四/一七	筑前	盛経	無	崇恵	末弘名中村彌二郎殿	無	仍執達如件	付	日下	○	軍役催促(警固番役)	○	折紙	一九五六一	
34	一一九七	永仁五/二/二四	筑前	盛経	無	前筑後守	雷山院主御坊御返事	無	仍執達如件	書下	日下	○	請取状		B型	一九四九四	
33	一一九七	永仁五/一〇/二八	筑前	盛経	無	盛経	千龜大進殿	無	之状如件	付	日下	○	遵行命令(検断沙汰)	○	折紙	一八五一〇	宛所守護代
32	一一九四	永仁二/三/二七	筑前	盛経	無	前筑後守	中村彌二郎殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	軍役催促(警固番役)		B型	一七七七一	
31	一一九一	正応四/二/一三	筑前	盛経	無	筑後守	納塚掃部左衛門尉殿	無	仍執達如件	書下	日下		召文・問状(訴訟関係)		B型	一六二二四	前欠「様式」を『福岡県史料』により訂正
30	一一八七	弘安一〇/三/二九	筑前	経資	無	浄恵	(なし)	無	仍執達如件	書下	日下	○	軍役催促(警固番役)		折紙	一五九六六	
29	一一八六	弘安九/八/二七	筑後	経資	無	大宰少貳	友清又次郎入道殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促(警固番役)		B型	一五一一四	
28	一一八四	弘安七/三/一一	筑前	経資	無	少貳	謹上安楽寺留守法橋御坊御返事	無	恐々謹言	書下	日下	○	相論状況説明		A型	一四六八三	
27	一一八二	弘安五/八/一〇	筑前	経資	無	少貳	怡土庄中村源四郎允殿	無	恐々謹言	書下	日下	○	召文・問状(合戦証人)		A型	一四四三一	
26	一一八二	／八/二七	肥前	経資	無	少貳	武雄大宮司殿	無	恐々謹言	無	日下	○	召文・問状(訴訟関係)		A型		

33	二二八八	弘安二／三／二〇	豊後 親時 無	因幡守	道殿	志賀村一方地頭太郎入	無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(訴訟關係)		B型	一六五五一	
32	二二八五	弘安八／三／二七	豊後 頼泰 無	沙彌	野上太郎殿		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(合戦証人)		B型	一五四九三	
31	二二八四	弘安七／六／一九	豊後 頼泰 無	沙彌	帆足兵衛尉殿		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(合戦証人)		B型	一五二一六	
30	二二八四	弘安七／六／一九	豊後 頼泰 無	沙彌	森三郎殿		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(合戦証人)		B型	一五二一五	
29	二二八四	弘安七／六／一九	豊後 頼泰 無	沙彌	野上太郎殿		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(合戦証人)		B型	一五二一四	
28	二二八一	弘安四／二／二	豊後 頼泰 無	前出羽守	古後左衛門尉殿／帆足 兵衛尉殿		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(合戦証人)		B型	一二七六九	
27	二二七七	建治三／七／五	筑後 頼泰 無	頼泰	(なし)		無	仍執達如件	書下 日下	〇	軍役催促(警固番役)		A型	一二二五三	
26	二二七六	建治三／三／五	豊後 頼泰 無	前出羽守	野上太郎殿		無	仍執達如件	書下 日下	〇	異国征伐軍主力注進命令		B型	一二二五二	
25	二二七六	建治三／三／五	豊後 頼泰 無	前出羽守	(なし)		無	仍執達如件	書下 日下	〇	軍役催促(祈禱命令)	〇	B型	補一六三八	
24	二二七五	建治二／九／二二	豊後 頼泰 無	前出羽守	野上太郎殿		無	仍執達如件	書下 日下	〇	軍役催促(警固番役)		A型	一二〇二二	
23	二二七五	建治二／六／五	豊後 頼泰 無	前出羽守	野上太郎殿		無	仍執達如件	書下 日下	〇	軍役催促(警固番役)		B型	一二八八三	
22	二二七五	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	(なし)		無	仍執達如件	書下 日下	〇	軍役催促(警固番役)		B型	一二九二三	
21	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(訴訟關係)		B型	一二二七〇	
20	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(訴訟關係)		B型	一二二七一	
19	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	頼泰	高田庄地頭代沙汰人御		無	仍執達如件	書下 日下	〇	神役催促		B型	一二二七七	
18	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(訴訟關係)		B型	一二二七〇	
17	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(訴訟關係)		B型	一二二七〇	
16	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(訴訟關係)		B型	一二二六三	
15	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	大隅一宮神宝調進命令		B型	一二二六一	
14	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	召文・問状(訴訟關係)		B型	一二二五九	
13	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	大隅一宮神宝調進命令		B型	一二二五九	
12	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	大隅一宮神宝調進命令		B型	一二二五九	
11	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	大隅一宮神宝調進命令		B型	一二二五九	
10	二二七三	文永二／五／一一	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	大隅一宮神宝調進命令		B型	一二二五九	
9	二二七二	文永九／二／二五	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	大隅一宮神宝調進命令		B型	一二二五九	
8	二二七二	文永九／二／二五	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	大隅一宮神宝調進命令		B型	一二二五九	
7	二二七〇	文永七／六／一四	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	大隅一宮神宝調進命令		B型	一二二五九	
6	二二六九	文永六／三／二三	豊後 頼泰 無	前出羽守	高田庄地頭代名主御中		無	仍執達如件	書下 日下	〇	大隅一宮神宝調進命令		B型	一二二五九	
5	二二四二	仁治三／三／二六	豊後 頼泰 無	散位藤原朝臣	(なし)		有	之状如件	書下 日下	〇	裁許		E型	六〇〇六	
4	二二三〇	寛喜二／三／一九	筑後 親秀 無	沙彌	筑後国上妻庄内筑紫部 今弘北田		有	之状如件	書下 日下	〇	安堵・補任		下文	三九七一	書出「守護所」

No	西暦	年／月／日	国名	守護	袖判	差出	宛所	事書	書止	年号	署判	正文	内容	施行	様式	『鎌』番号	備考
16	一一七六	建治二／閏三／五	薩摩	久時	無	久時	大隅五郎殿	無	恐々謹言	書下	日下		軍役催促(異国征伐)		A型	一一二九三	
15		(弘長三カ)二／一四	薩摩	忠時	無	在判	国分左衛門尉殿	無	穴賢々々	無	日下		軍役催促(大番催促)		G型	八八五八	
14	一一六二	弘長二／八／一一	薩摩	忠時	無	沙彌	国分左衛門尉殿	無	之状如件	書下	日下		軍役催促(大番催促)		C型	八八五六	
13	一一六二	弘長二／八／一一	薩摩	忠時	無	沙彌	宮里郷郡司名主御中	無	之状如件	書下	日下		軍役催促(大番催促)		C型	八八五五	
12	一一六二	弘長二／八／一一	薩摩	忠時	無	沙彌	満家非志嶋太郎殿	無	之状如件	書下	日下		軍役催促(大番催促)		C型	八八五四	
11	一一六二	弘長二／八／一一	薩摩	忠時	無	沙彌	薩摩郡平三郎殿	無	之状如件	書下	日下		軍役催促(大番催促)		C型	八八五三	
10	一一六二	弘長二／八／一一	薩摩	忠時	無	沙彌	薩摩平十郎殿	無	之状如件	書下	日下		軍役催促(大番催促)		C型	八八五二	
9	一一五七	正嘉二／八／三二	薩摩	忠時	無	前大隅守	比志嶋太郎殿	有	状如件	書下	日下	○	安堵・補任		E型	八一三五	
8	一一四七	宝治二／一／二二	薩摩	忠時	有	左兵衛尉	惣地頭紀二郎左衛門尉殿	無	之状如件	書下	日下	○	遵行命令(訴訟関係)		F型	六九〇〇	
7	一一四七	宝治二／八／一一	薩摩	忠時	無	前大隅守藤原	(なし)	無	之状如件	書下	日下	○	安堵・補任		F型	六八六七	
6	一一一五	(建保三)一一／二二	薩摩	忠久	無	(在判)	薩摩方地頭代殿	無	之状如件	書下	日下	○	遵行命令(大番催促)		G型	二四一一	
5	一一一五	(建保三)一一／二二	薩摩	忠久	有	中務丞忠俊奉	みやさとの八郎殿	無	あなかしこ	無	日下		軍役催促(大番催促)		G型	二四一一	かな書き
4	一一一一	建暦二／七／二	薩摩	忠久	有	中務口口	阿多郡司殿	有	之状如件	書下	日下	○	遵行命令(安堵・補任)		奉書	二四一一	
3	一一九七	建久八／二／二四	薩摩	忠久	無	右兵衛尉	薩摩国御家人御中	無	之状如件	書下	日下		軍役催促(大番催促)		C型	九五六	
2	一一九七	建久八／二／二四	薩摩	忠久	無	左衛門尉	薩摩国地頭家人御中	無	之状如件	書下	日下		軍役催促(大番催促)		D型	九五五	
1	一一九七	建久八／二／二四	薩摩	忠久	無	右衛門兵衛尉	薩摩国御家人御中	無	之状如件	書下	日下		軍役催促(大番催促)		C型	九五四	
No	西暦	年／月／日	国名	守護	袖判	差出	宛所	事書	書止	年号	署判	正文	内容	施行	様式	『鎌』番号	備考

表IV 島津氏

44	一一三三	元弘二／九／九	豊後	貞宗	無	沙彌	同宮主御房	無	仍執達如件	書下	日下	○	軍役催促(祈禱命令)		B型	料九	
43	一一三三	元弘二／九／五	豊後	貞宗	無	沙彌	豊前蔵人三郎入道殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	軍役催促(行幸警固)		B型	三二五九	
42	一一三四	元亨四／八／一一	豊後	貞宗	無	近江守	野上清左衛門尉殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	召文・問状(訴訟関係)		B型	二八七九	
41	一一三三	正和二／一〇／二四	豊後	貞宗	無	左近將監	都甲四郎入道殿・恵良五郎入道殿	無	仍執達如件	書下	日下		遵行命令(所務沙汰)		B型	二五〇二	
40	一一〇九	延慶二／二／二七	豊後	貞親	無	出羽守	六郷山執行御房	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促(祈禱命令)		B型	補一八八〇	
39			豊後	貞親	無	一	豊後國守護代殿	一	一	一	一		軍役催促(警固番役)		不明	二二七三	断簡
38		(嘉元二カ)	豊後	貞親	無	一	一	一	一	一	一		軍役催促(警固番役)		不明	二二七三	断簡
37	一一〇三	乾元二／九／二〇	豊後	貞親	無	左近將監	六郷山執行御房御返事	無	恐々謹言	付	日下	○	請取状		A型	補一八一七	
36	一一〇〇	正安二／三／二五	豊後	貞親	無	散位	豊後國守護代殿	無	之状如件	書下	日下	○	遵行命令(検断・雜務沙汰)		C型	二〇四一一	宛所守護代
35	一一九四	永仁二／四／二二	豊後	親時	無	前因幡守	六郷山執行御房御返事	無	恐々謹言	付	日下		遵行命令(検断・雜務沙汰)		A型	補七七三	
34	一一九四	永仁二／二／二二	豊後	親時	無	前因幡守	小田原四郎左衛門尉殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	召文・問状(訴訟関係)		B型	一八四八七	

註 NO八・一九・二二・二三の「年号」を付年号としたが、「文永元年」のように付年号では本来表記しない「年」字が書かれている。

17	一二七六	建治二／閏三／五	薩摩	久時無	久時	吉富次郎殿	無	恐々謹言	書下	日下		軍役催促（異国征伐）	一二二九四	
18	／一二／七		薩摩	久時無	久時	宮里郡司殿	無	恐々謹言	無	日下		軍役催促（警固番役）	一二六五五	遺文一三七八 九は同文書
19	二二八〇	（弘安三）七／二二	薩摩	久時無	修理亮	五郎大郎殿御返事	無	恐々謹言	無	日下		具書の扱いについて返信	二四〇二一	正史『鹿兒島県 「年号」を訂
20	二二八四	弘安七／一／二三	薩摩	忠宗無	前下野守	□國地頭御家人并本所 一円地及收納使御中	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促（警固番役）	一五〇五七	
21	二二八九	正応二／二／三	薩摩	忠宗無	左衛門尉忠宗	薩摩國地頭御家人并本 所一円地及收納使御中	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促（警固番役）	一六八七四	
22	二二九一	正応四／三／六	薩摩	忠宗無	左衛門尉	新田宮執印殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促（祈禱命令）	一七五六四	
23	二二九一	正応四／六／四	薩摩	忠宗無	左衛門尉	比志嶋孫太郎殿	無	之狀如件	書下	日下		召文・問狀（訴訟關係）	一七六二五	
24	二二九三	正応五／一／二二	薩摩	忠宗無	左衛門尉	寇嶽別當住僧御中	無	仍執達如件	書下	日下	○	軍役催促（祈禱命令）	一八〇七五	
25	二二九三	正応六／四／一〇	薩摩	忠宗無	左衛門尉	薩摩國新田宮執印殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	異国降伏祈禱用途の送付	一八一七五	
26	二二九三	（正応六）四／二三	薩摩	忠宗無	左衛門尉	薩摩國地頭御家人御中	無	仍執達如件	無	日下		軍役催促（警固番役）	一八一七九	
27	二二九三	正応六／五／一一	薩摩	忠宗無	左衛門尉	新田宮執印殿	有	仍執達如件	書下	日下		送文	一八一九七	
28	二二九三	正応六／五／一一	薩摩	忠宗無	左衛門尉	新田宮執印殿	無	仍執達如件	書下	日下		異国降伏祈禱用途の送付	一八一九八	
29	二二九七	永仁五／八／晦	薩摩	忠宗無	忠宗	式部孫五郎殿	無	恐々謹言	付	日下	○	關東御教書案の送付	一九四三八	
30	二二九八	永仁六／一〇／一	薩摩	忠宗無	下野守忠宗	謹上對馬守殿	無	恐々謹言	付	日下		送文	一九八三八	
31	二二九九	永仁七／四／一	薩摩	忠宗無	下野守	（なし）	無	仍執達如件	書下	日下		神社修造仏神事催促	二〇七〇〇	
32	二二九九	正安三／一／一〇	薩摩	忠宗無	前下野守	薩摩國寺社供僧神官中	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促（祈禱命令）	二〇七〇〇	
33	二二九九	正安三／八／二五	薩摩	忠宗無	前下野守	國分寺留守殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促（祈禱命令）	二〇八四八	
34	二二九九	嘉元二／一／二三	薩摩	忠宗無	沙彌	國分寺別當御坊	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促（祈禱命令）	二一七三〇	
35	二二九九	延慶三／五／四	薩摩	忠宗無	沙彌	國分寺留守殿	無	之狀如件	書下	日下		軍役催促（祈禱命令）	二二九八三	
36	二二九九	正慶二／四／一	薩摩	貞久無	沙彌	薩摩國地頭御家人御中	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促	三二〇七八	

表V 名越氏（得宗家を含む）

NO	西曆	年／月／日	国名	守護	袖判	差出	宛所	事書	書止文言	年号	署判	正文	内容	施行	様式	『錄』番号	備考
1	一一〇三	建仁三／一〇／二六	薩摩	時政有		（袖判）	（なし）	有	之狀如件	書下	袖		安堵・補任		下文	一一九五	
2	一一〇三	建仁三／一二／九	薩摩	時政有		景成奉	長沢左衛門尉殿	無	仍以執達如	書下	日下		訴訟事務		奉書	一一四二	
3	一一〇三	建仁三／一二／二八	薩摩	時政無		遠江守	嶋津御庄内薩摩国山門 院住人	有	之狀如件	書下	奥		安堵・補任		下文	一一四一六	書出「下」
4	一一一七	建保五／九／二六	大隅	義時有		散位為原奉	藤内兵衛尉殿	無	仍以執達如	書下	日下		遵行命令（裁許）	○	奉書	一二三三六	宛所守護代
5	一二二五	嘉禄一／八／	大隅	朝時無		散位平	（なし）	有	之狀下知如	書下	奥	○	裁許		下知狀	三四〇〇	

表VI 金沢氏

NO	西暦	年/月/日	国名	守護	袖判	差出	宛所	事書	書止文言	年号	署判	正文	内容	施行	様式	『鎌』番号	備考
12	一一三〇	嘉元一/二二/二三	大隅	時直	無	時直	河上大宮司殿	無	之状如件	書下	日下		遵行命令(狼藉停止)	○	C型	二一七一〇	発給者守護代
11	一一三〇	乾元二/四/一九	肥前	政顕	無	左兵衛允	白魚九郎殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促(警固番役)	○	B型	二一四三六	発給者守護代
10	一一三〇	正安四/一〇/八	肥前	政顕	無	左兵衛允	河上大宮司殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促(警固番役)	○	B型	二一五九	発給者守護代
9	一一三〇	正安三/八/二六	肥前	実政	無	藤原	河上大宮司殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促(祈禱命令)	○	B型	二〇四六八	発給者守護代
8	一一三〇	正安三/八/二五	大隅	時直	無	越後九郎	正八幡宮別当備前守殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促(祈禱命令)	○	B型	二〇五五六	発給者守護代
7	一一三〇	正安二/八/二	肥前	実政	無	為尚	河上社大宮司殿	無	仍執達如件	付	日下		河上社破損注進命令	○	B型	(なし)	註を参照
6	一一三〇	正安二/六/二一	大隅	時直	無	政守護代藤原範	謹上加治木郡司殿	無	恐惶謹言	書下	日下		軍役催促(警固番役)	○	A型	二〇四六八	発給者守護代
5	一一二九	永仁六/九/二	肥前	実政	無	為尚	白魚九郎殿	無	仍執達如件	書下	日下		囚人預置	○	B型	一九七九	発給者守護代
4	一一二九	永仁六/三/一一	肥前	実政	無	右衛門尉	安德弥二郎入道殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	遵行命令(検断沙汰)	○	B型	一九六二四	発給者守護代
3	一一二七	永仁五/七/一七	肥前	実政	無	右衛門尉	河上社大宮司殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促(祈禱命令)	○	B型	一九三九九	発給者守護代
2	一一二七	永仁五/六/一二	肥前	実政	無	右衛門尉為尚	青方四郎殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促(警固番役)	○	B型	一九三九九	発給者守護代
1	一一二七	永仁五/六/一二	肥前	実政	無	河上社大宮司殿	河上社大宮司殿	無	仍執達如件	書下	日下		軍役催促(祈禱命令)	○	B型	一九三九九	発給者守護代
NO	西暦	年/月/日	国名	守護	袖判	差出	宛所	事書	書止文言	年号	署判	正文	内容	施行	様式	『鎌』番号	備考

参考	一一二八	安貞二/八/一七	加賀	朝時	無	越後守平	(なし)	有	之状下知如件	書下	日下		裁許		下知状	三七七五	
17	一一二七	文永八/九/二七	大隅	公時	無	左近将監	(なし)	有	之状如件	書下	奥		守護所使人部停止		F型	一〇八八五	
16	一一二五	正嘉二/一〇/一八	大隅	時章	無	前尾張守平	(なし)	有	仍執達如件	書下	奥	○	和与承認		下知状	八二九九	宛所守護代
15	一一二五	(正嘉二)一一/三	大隅	時章	無	頼継	藤内右衛門入道殿	無	之状如件	書下	奥	○	遵行命令(裁許)		奉書	八二九九	宛所守護代
14	一一二四	建長六/一/一四	大隅	時章	無	前尾張守平	(なし)	有	之状如件	書下	奥	○	安堵・補任		F型	七六九三	
13	一一二五	建長五/九/九	肥後	時章	無	前尾張守平	(なし)	有	之状如件	書下	奥	○	裁許		F型	七六九三	
12	一一二五	建長二/一/一三	大隅	朝時	有	沙彌守阿奉	藤内右衛門尉殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	遵行命令(訴訟関係)		奉書	六二三〇	宛所守護代
11	一一二四	寛元一/八/二九	大隅	朝時	有	右衛門尉家康	藤内右衛門尉殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	遵行命令(裁許)		奉書	五九五六	宛所守護代
10	一一二四	仁治二/一/一	大隅	朝時	有	藤原宗康奉	平右衛門尉殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	遵行命令(召文・問状)		奉書	四六九八	宛所守護代
9	一一二四	天福二/一/九	大隅	朝時	有	藤原宗康奉	肥後左衛門尉殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	遵行命令(安堵・補任)		奉書	四六八〇	宛所守護代
8	一一二四	天福二/七/二	大隅	朝時	有	藤原宗康奉	肥後左衛門尉殿	無	仍執達如件	書下	日下	○	遵行命令(安堵・補任)		奉書	四六八〇	宛所守護代
7	一一二九	寛喜一/一/一一	大隅	朝時	無	散位藤原朝臣	(なし)	無	依越後守殿	書下	日下	○	遵行命令(召文・問状)		奉書	三八九三	
6	一一二五	(嘉禄一)八/一二	大隅	朝時	無	散位	(なし)	無	恐々謹言	無	日下	○	裁許状の送付		A型	三三九六	

13	一三〇四	嘉元二／一／八	肥前	政頭無	左兵衛尉	—	無	仍執達如件	書下	日下	軍役催促（祈禱命令）	〇	B型	二一七二六	発給者守護代
14	一三〇五	嘉元三／五／一	肥前	政頭無	為政	白魚九郎入道殿	無	之狀如件	付	日下	囚人預置		G型	二二一九七	発給者守護代
15	一三〇五	嘉元三／一／三	大隅	時直無	時直	守護代	無	之狀如件	書下	日下	遵行命令（訴訟関係）		C型	二二四〇四	発給者守護代
16	一三〇五	（嘉元三）閏二／七	肥前	政頭無	左衛門尉	福嶋二郎入道殿、志佐小二郎殿	無	仍執達如件	無	日下	召文・問状（訴訟関係）		B型	二二四三六	発給者守護代
17	一三〇六	嘉元四／四／一	肥前	政頭無	為政	大村大郎殿、多久小太郎殿	無	仍執達如件	付	日下	召文・問状（訴訟関係）		B型	二二六〇五	発給者守護代、 「年号」を『松浦党関係史料集』により訂正
18	一三〇九	延慶二／二／二七	肥前	政頭無	沙彌	河上社大宮司殿	無	仍執達如件	書下	日下	軍役催促（祈禱命令）	〇	B型	二二六〇七	発給者守護代
19	一三一〇	延慶三／五／一三	肥前	政頭無	—	河上社大宮司殿	無	仍執達如件	書下	日下	軍役催促（祈禱命令）		B型	二二九三三	発給者守護代
20	一三一二	正和一一／〇／二	大隅	時直無	前上野介	守護代	無	之狀如件	書下	日下	遵行命令（狼藉停止）		C型	二四六六八	発給者守護代
21	一三一五	正和四／四／六	豊前	政頭無	景長	宇佐宮惣校殿	無	仍執達如件	書下	日下	軍役催促（神馬守護）		B型	二六六二一〇	発給者守護代
22	一三二一	文保一／五／二二	大隅	時直無	前上野介	救仁郷地頭代	無	之狀如件	書下	日下	遵行命令（召文・問状）		C型	二六六二一〇	発給者守護代
23	一三二一	文保一／〇／一八	豊前	政頭無	左衛門尉光時	謹上宇佐宮御馬所校殿	無	恐々謹言	付	日下	送文		A型	二六三九九	発給者守護代
24	一三二三	元亨三／九／一九	豊前	貞義無	沙彌道景	謹上惣校殿	無	恐々謹言	付	日下	送文		A型	二八五二九	発給者守護代
25	一三二五	正中二／五／二	豊前	貞義無	平政親	謹上宇佐宮惣校殿	無	恐々謹言	付	日下	送文		A型	二九一〇三	発給者守護代
26	一三二七	嘉暦二／五／一〇	肥後	高政無	掃部助	相良六郎三郎入道殿	無	仍執達如件	書下	日下	召文・問状（当知行確認）	〇	B型	二九八四四	発給者守護代
27	一三二七	嘉暦二／九／二〇	肥後	高政無	掃部助	詫磨豊前權守入道殿	無	仍執達如件	書下	日下	召文・問状（当知行確認）	〇	B型	二九八四四	発給者守護代
28	一三三〇	元徳二／三／一一	肥後	高政無	掃部助	守護代	無	之狀如件	書下	日下	遵行命令（所務沙汰）	〇	C型	三〇九六四	発給者守護代
29	一三三〇	元徳二／八／一四	豊前	貞義無	藤原景義	謹上宇佐宮惣校殿	無	恐々謹言	付	日下	送文		A型	三〇七二二	発給者守護代

註 NO8は、川添昭二「鎮西評定衆及び引付衆・引付奉行人」『九州中世史研究』第一輯 文献出版 一九七八年 引用史料を参照した。

【項目の説明】

「年号」日付の年号の表記方法。年号無し「無」、書下年号「書下」、付年号「付」。

「署判」発給者の署判の位置。「日下」、「奥」、「袖」の3種類。なお表1では府官の署判の位置を示す。

「施行」幕府や探題、朝廷の文書を受けて発給していることが文中に記されているもの、または他の文書からそのことが明らかなのに「〇」。

「様式」「はじめに」で示した様式名（下文（又は牒）・下知状・奉書・書下）に分類し、さらに書下の場合、書下A型を「A型」のように表記。

「鎌倉番号」参照した『鎌倉遺文』の文書番号を記入。『鎌倉遺文』未収のものは参照した刊本。